

# 小諸の苺ジャム製造とジャムの日

浅間山の火山堆積物と寒冷な気候により、かつては、稲・雑穀・養蚕が中心だった小諸の農業。塩川伊一郎父子（旧三岡村）が木村熊二先生の助言を受けて取り組んだ果樹栽培は「三岡の桃」を生み、桃の缶詰工場の成功により佐久地域の農業と生活を大きく発展させました。

桃の缶詰製造は夏の一時期に集中することから、できるだけ工場の稼働期間を長くするために農家に対して「苺」の栽培を推奨し「ジャム」の製造に取り組みました。

当時は、今よりも肥料や栽培技術が未発達だったため、米は不足がちで、田んぼへ稲以外の作物を作ることなど考えられない時代でした。そこで、塩川氏は減収補償として一反歩あたり、米で得られる収入相当額と苺の摘み取り代を農家に支払う仕組みをつくりました。

農家は稲を作るよりもはるかに多い収入を得ることができるようになり、栽培面積も急速に広がりました。

ジャムの販売に関しては、各種品評会に出品し優秀な成績を上げることで品質の高さが認知され、旧小諸町の間屋を通じて日本各地へ販売されるようになりました。そして、明治 43 年 4 月 20 日、長野県知事から明治天皇にジャムが献上されたことで名実ともに品質の高さを示すこととなりました。

平成 27 年 7 月、日本ジャム工業組合（東京・千代田区）により、この塩川氏の取組みが今日のジャム産業の礎になったとして 4 月 20 日が「ジャムの日」として制定されました。

【発行】 小諸市経済部農林課  
URL <http://www.komoron.com>



皇室へ献上されていた記録

出典・参考資料

『塩川伊一郎評伝』

(小林收編著/龍鳳書房)



ジャムの日  
制定記念

4月20日は、  
小諸 ジャムを食べる日

oishii komoro